

当分むずかしそうである。

学部図書室として今後の貢献の道は、今まで以上の内容の整備とともに新しい仕事としてはパンフレットや謄写印刷物などの収集整理であろう。このような出版物は、公式の文献としては認められないものもあるが、一方研究上の資料としては極めて価値の高いものもある。国外のものはもとより、国内のものも雑誌や単行本とちがって、多くは再入手が不可能に近い。どうやら周囲の研究室でも、この種の膨大な資料が部屋のすみにねむっている様子である。ただ素人の個人が整理をするのは、時間的にも技術的にもまず不可能である。専門家の意見をきくと、私の学部の場合は職員1名(?)あれば十分だそう。調査旅行から帰ったあと、集めた資料を図書室に引渡しさえすればことが済むとなれば、さぞかしさっぱりするだろう。まして他の人のお役にたつこともでき、図書室も金をかけずに充実するのだから一石三鳥ともいえる。この仕事はまだどの図書館(室)も手がけていないそうである。その理由の一つは金を出して買ったものは保管に責任をもてるが、ただのものはどうも力が入らないという。冗談でしょうね。

(農学部教授)

新村先生の御蔵書

浜 田 敦

私が物心ついた頃から、ずっと長い間、京大の総長といえば荒木、図書館長は新村ということになっていたような記憶がある。それもそのはず、新村出先生が、教授としては初代の、図書館長になられたのは、明治末年私の未生以前のことに属し、停年退官と共にそれを辞されたのが、丁度私の大学に入学した昭和11年の秋だったのである。このように、新村先生は京大御在任のほとんど全期間を通じて図書館長を兼ねられたのであるが、これは、先生が全くその職に御適任であったことを物語るものといってよい。先生がまだ学生の頃は博言学とよばれた、その御専攻の学問の必要上からも、和漢洋の古今にわたる文献に精通され、また趣味としても、こよなく書物を愛された先生であった。その御著書、論文の過半は、何等かの意味で、本に関することが問題となっていたといえるであろう。

しかし、本に親しみ、本を愛された先生ではあったけれども、一部のいわゆる愛書家に見られるように、書に淫するとでもいうべき、私蔵欲、物質的執著は一切持たれなかった。従って、先生の御蔵書には、珍本、稀覯書というべきものは全く見られず、すべては、学問の必要から購入され、あるいは、門下生などから献呈された、実用的な本ばかりであった。戦争も漸く末期に近く、京都でも家財などの疎開が問題になった頃、毎週一度お仕事のお手伝いに行っていたそのある日、何かの話しの序に、自分の蔵書には疎開しなければならないような珍本としては何もないが、少しでも人の役に立つものをより安全な場所へ移したいとは思っても、書齋、書庫の整理さえ、この年では思うにまかせぬとお言葉に、それなら私がお手伝いいたしましよと申出て、当時研究室につとめていた徴用のがれのお嬢さん方数人を引きつれて、一週間ばかりもかかって、先生のお宅の書庫の隅々までひっくりかえして大掃除をしたことがあった。

そのお蔭で、私は先生の御蔵書に精通し、先生から逆に、あの本はどこにあったかねとた

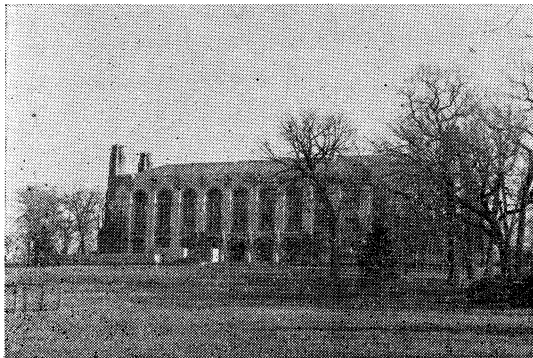
ずねられ、即座に、どの本棚の何段目のどの辺にありますとお答え出来るようになったのである。その時感じたことは、まず、当然のことながら、先生の御蔵書が実に多方面にわたり豊富なことであるが、しかもそれが先生も仰有るようにすべて実用的な普通の本ばかりであり、一冊一冊が隅々まで丹念に目を通されている証拠に、しおりの紙が沢山挿み込まれ、方々に御自筆の墨、朱、インキ、鉛筆など各種の書き込みがなされており、決してソンでおかれたものでなく、常に使用されていることが、なまなましく感じられるものばかりであることだった。これは、学者の蔵書としては別に不思議ではないはずであるが、特に国文学関係の学者の中には、珍本を蒐めることに夢中で、それがただちに学問であるかのように錯覚している人も少なくないのに思い比べて、深い感銘を覚えたのである。

それから数年、戦争も終り、先生の御蔵書も京都の町と共に無事残ったが、新制大学発足に伴い、はからずも私が勤めることになった大阪市立大学の図書館を充実するために、先生の御蔵書の幾分を御割愛頂ければとお願いしたところ、二つ返事で御快諾下さったのである。現在、その図書館に、新村文庫と名づけられて、ながく先生の学徳を偲ぶよすがとして、蔵されている数千冊の本がこれである。
(文学部教授)

本館の第3代館長として明治44年より昭和11年まで、26年の長きにわたり、図書館の発展をみちびかれた名誉教授新村 出先生は、去る8月17日午後7時、90才の長寿を全うされ逝去されました。ここに、生前の先生を偲ぶ意味で、浜田教授に御寄稿を頂きました。

外国の大学図書館

NORTHWESTERN 大学の図書館



新 宮 秀 夫

ノースウェスタン大学はシカゴの北約20キロほどのミンガン湖畔のエバンストンという町にあります。創立は1851年で現在学生数は約1万人です。主な図書館は中央図書館、医学部図書館と理工系図書館の3つで、もちろん中央図書館が一番大きいのですが、建物がすでに古く、狭

くなったので、現在数千万ドルという予算で新館を旧図書館の裏に建てているところです。蔵書数は知りませんが、旧館の規模は大体京都大学の中央図書館位でした。現在は書庫には普通入れないことになっていますが、新館ができるとすべて開架式になるようです。医学部はシカゴにあります。図書館は十数階建のビルの一階の一部にあり、蔵書が多いことが自慢だったようです。ビルそのものが新しく、書庫も閲覧室も余裕が充分あって気持ちよい雰囲気でした。開架式ですが、医学部関係の者以外は特別の許可がないと図書館に入ることはできません。理工系の学科は全部ひとつづきの建物に入っており、図書館が一番上の四階の一部にあります。約300人入れる閲覧室と四階ある書庫があり、書庫には自由に入ることがで